

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K12332

研究課題名(和文)退職後の団塊世代男性を対象とした介護予防の担い手養成プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a program to train retired male baby boomers to become leaders in caregiver prevention

研究代表者

米澤 洋美 (YONEZAWA, HIROMI)

福井大学・学術研究院医学系部門・准教授

研究者番号：10415474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：退職後の団塊世代男性を対象とした介護予防の担い手養成プログラムの開発を目的として、住民参加型アクションリサーチの手法を用いて、退職後高齢者の就業先として地方農村部で主要なシルバー人材センター会員によるヘルスコーディネーターの養成を行った。シルバー人材センター会員が全会員の健康づくりを目的として企画から参加する健康づくり活動である。課題の特定から計画・実施・振り返りの一連の過程を質的に分析した。結果、健康課題決定までに健康課題は5つ抽出された。その内容は、認知症、自分で思っているより危険な自動車運転、就業中のストレス、注意力の低下へと変化し、最終的に、老いへの自覚が決定された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シルバー人材センター会員という定年退職後も就業を通じて賃金を得たり、体力の維持増進や生きがいを求めたりする健康レベルにある高齢者にとって、認知症や転倒、自動車運転技術等の不安は、全く無いとは言わないが日頃実感する不安ではないと考えられる。最終的に抽出された老いへの自覚はその手前を補うものであり、長く就業するという目的と関連して動機づけにすることができれば就業を通じた介護予防に効果が期待できるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Aiming to develop a program to train care prevention leaders for retired male baby boomers, we trained health coordinators among members of the Silver Human Resource Center, a major employer of retired elderly people in rural areas, using an action research approach based on resident participation. This is a health promotion activity in which Silver Human Resources Center members participate from the planning stage for the purpose of promoting the health of all members. The series of processes from issue identification to planning, implementation, and reflection were qualitatively analyzed. As a result, five health issues were identified by the time the health issues were determined. The content changed to dementia, driving a car that is more dangerous than one thinks, stress during employment, and decreased attention span, and finally, awareness of aging was determined.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：団塊世代 男性 介護予防 シルバー人材センター 健康づくり アクションリサーチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

団塊世代と呼ばれる 66-68 歳人口 (1947-1949 年までの 3 年間に出生した世代およそ 664 万人) は全人口の約 5.3% を占め、他の年齢階級よりも多く、突出している。団塊世代が全て 75 歳以上となる 2025 年以降は 4 人に 1 人が 75 歳以上という超高齢社会が到来する。このことは労働市場だけでなく健康・介護予防においても大きな転換点を迎える。団塊世代が給付を受ける側に回ることで医療、介護、福祉サービスの需要は高まり、社会保障財政のバランスが崩れる恐れがある (社会保障制度改革国民会議、2013)。今後一層、介護に関わる専門職の不足が予測されるため、生活に関わる多様なサービスにも資格のないボランティア等が担い手として活躍することも期待されている。

介護予防事業の課題の一つとして男性参加者が少ないという問題がある。自立状態から要介護になるリスクの性差は大きくないため、男性高齢者の介護予防対策が急務といえる。定年退職後の行動は“地域デビュー”の言葉に代表されるようにこれまでの会社人間から地域でのボランティア活動等に勤しむ高齢者がいる。しかしその一方、これまで地域とのつながりもなく過ごしてきたため、定年退職を迎えても地域に根差した生活を考えようとはしない集団がいる。地域における高齢者相互の助け合いの担い手は女性中心であることが知られている。男性は仕事が生活の中心であった時間が長く、退職後に地域ネットワークに溶け込みにくい。職住隣接でなければ次第に当時の同僚等とも疎遠になり孤立・閉じこもりの危険性が高い。退職直前の団塊世代男性を対象にした質的調査でも退職後の暮らしや健康管理に対して具体的イメージに乏しく「できる限り仕事とともにある暮らし」を望み、「余暇は地域にとどまらない」などの特徴が抽出され、介護保険制度が現在提供しているメニューとは乖離があることが明らかになった。

その一方、我が国高齢者は諸外国に比べて就労意欲が高いという特徴を持つ。それは、経済的側面以外にも健康づくりや仲間づくりの目的で定年退職後も働きたいとする高齢者が多いことを意味する。シルバー人材センター (以下、SC) は高齢者が働くことを通じて追加的収入を得るとともに健康を保ち、生きがいをもって地域社会に貢献する公共性・公益性の高い社団法人である。会員の男女比はおよそ 6 : 4 と地域の中では男性の参加者が多い組織といえる。SC への入会動機は仲間づくり及び健康増進が上位を占めていた。また、会員の健康づくりを積極的に行う先進的な SC においては、その担い手は自身の利点だけでなく他者や組織全体への貢献も意識していた。

これからの健康政策において、社会コストを低く抑えるとともに健康課題をコミュニティの力で解決していくコミュニティソリューション (互助・共助) が有効である。しかし介護予防や健康づくりを前面に掲げて男性高齢者を介護予防事業への参加を促すには限界がある。そこで海外のボランティア活動をモデルとし、互助・共助としての SC の枠組みを利用し「日本版・高齢者が高齢者を支える体制の構築」を目指すことが求められていると考える。

そこで団塊世代の男性高齢者の退職後の社会参加と高齢者が高齢者を支える体制との関連に注目する。閉じこもり等を予防する介護予防事業への男性の参加が少ないことが全国的に問題視されている。退職前から彼らの行動に注目し追跡した結果、退職後は社会参加に必要な「居場所」と「出番」を地域の SC に求めていることが明らかとなったため、彼らの「居場所」と「出番」を介護予防の担い手となるプログラムによって開発することは、高齢者が社会に支えられる側から社会を支える側へ転換するための有効な方策と考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、SC を舞台に団塊世代男性を対象にした介護予防の担い手養成プログラムを開発することで、新たな介護予防シルバー人材モデルの構築を目指す。これまでの介護予防事業の対象者の把握体制を踏襲せず、就労の延長上でありながら概ね自治体単位で全国に事業展開している SC 等を拠点に、地域の高齢者の健康づくりを支援するシニア・ヘルスコーディネーター (仮称) を団塊世代男性から養成し、高齢者が高齢者を健康づくりの側面から支える新しい体制づくりの検証を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 国外先進事例の収集

定年退職後の活動と健康との関連を質的に情報収集し主体的に活動するための示唆を得ることを目的とし国外先進団体への関係機関ヒアリング調査を実施した。

研究協力者： スウェーデン・ストックホルム市の高齢者支援団体代表者および加入者の 65 歳前後の高齢者 15 名程度 (2016 年 8 月) フィンランド・ヘルシンキ市の読み聞かせボランティア団体参加者、職能組合職員 10 名程度 (2019 年 8 月)

調査項目：活動の経緯、活動内容、活動参加頻度、活動以外の過ごし方、家族以外とのつながり、健康観等

(2) シニア・ヘルスコーディネーター養成の検証

地方農村部の SC においてシニア・ヘルスコーディネーターとして募集された会員が、自らが自分たちの健康課題を考え、その課題解決に向けた健康づくり活動を実施し評価を行うまでの「主体的活動」の第 1 サイクルのプロセスと、そのプロセスに対する支援者に求められる支援を明らかにすることとした。

研究デザイン：研究デザインはミューチュアルアプローチに基づく（Holter、I. M. 1993）参加型アクションリサーチ；Action Research（以下、AR）とした。参加型ARは、当事者自身がその問題解決の道筋を探り、問題解決の進捗状況の度合いを探りながら問題解決の追及を支援していく。これはSC会員が主体的活動に向け問題解決を図る道筋と類似していると考えた。会員はSCと雇用関係がなく個人事業主の扱いであり、労働者の扱いではないことから労災保険の対象でもない。そのため、万一就業中に怪我や事故に遭遇したり病気になったりした場合の補償はシルバー保険に限定される。故に会員一人一人の健康維持に向けた取り組みが求められる。だからこそ、その方策として会員による主体的な健康づくり活動がふさわしいと考えた。

シニア・ヘルスコーディネーターによる主体的健康づくり活動の展開のプロセス

【目的】地方農村部における高齢者就業の主流であるSCは、会員同士の交流や健康維持を目的に所属している者も多い。そこで、地方農村部SCにおいて、健康づくり活動に取り組むための健康課題決定に至るまでの変遷を明らかにすることを目的とした。

【方法】参加型ARの過程で得た会議の逐語録データの質的分析を行った。このARは、X県Z町に位置するSCにおいて、会員の健康維持を目的とした会員参加型の活動である。主な参加者はSC会員12名の他、SC事務局職員、地域包括支援センター保健師、社会保険労務士である。主体的健康づくり活動の展開のプロセスを健康づくり活動（以下、活動）の実行委員会会議（1回2時間程度）の議事録にて分析した。本会議は、健康課題の決定、計画立案、実施後評価をするための会議であるが、本報告では健康課題の決定に至るまでの会議（2017年1月～6月）のデータを分析対象とした。会議は全ての参加者の同意を得て録音、逐語録を作成した後、健康課題に関する発言部分を抽出し質的記述的に分析した。

【倫理的配慮】研究協力者に研究の趣旨、参加の自由意志、プライバシーの保証等について文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。なお、福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得た（整理番号20160123）。

シニア・ヘルスコーディネーターによる主体的健康づくり活動実施の変化

【目的】地方農村部のSCにおいてシニア・ヘルスコーディネーターの活動の企画運営を通じた健康や協働作業に対する認識の変化を明らかにすることを目的とした。シニア・ヘルスコーディネーターが活動を推進する上でのSC事務局や地域包括支援センター等後方支援の在り方を検討する。

【方法】シニア・ヘルスコーディネーターに無記名自記式質問紙調査を実施。記入後の調査票は、封筒に入れて回収した。調査方法：自記式質問紙法を用い、記入後の調査票は、封筒に入れて回収した。調査項目：1) 対象の基本属性（性別、年齢、会員歴、家族員数、通院の有無）2) 長濱らによる協同作業認識尺度（18項目）：下位の3因子「協同効用因子」「個人志向因子」「互惠懸念因子」から成る。下位尺度毎の合計点を尺度得点とした。3) 石川らによる一般向けヘルスリテラシー尺度（5項目）；全項目の合計得点を尺度得点とした。調査時期：調査項目1)は第1回会議開始前、2)3)は第1回会議開始前、4)終了後、最終会議終了後。調査期間：平成29年1月～6月。分析方法：記述統計の後、各尺度得点は反復測定による一元配置分散分析を行った。有意水準は5%とした。

【倫理的配慮】研究協力者に研究の趣旨、参加の自由意志、プライバシーの保証等について文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。なお、福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得た（整理番号20160123）。

活動会議におけるファシリテーターの役割と目的の分析

【目的】本会議ファシリテーターとして参加した研究者の役割とその目的を明らかにすることとした。

【方法】上記の活動会議において、ファシリテーターの発言や行為から以下の3つの分析を行った。

・ファシリテーターの活動会議での行為

活動会議中の行為については逐語録に起こした文字データ、活動会議の録音を補助する活動会議メモ、板書に書かれた内容、各回作成した振り返り記録（全参加者へ配布）から、活動会議前後の行為については各回作成した振り返り記録（全参加者へ配布）、他メンバーへ送ったメールから各活動会議終了後に記載した。

ファシリテーターの役割については質的演繹的に毎回分類し、目的については活動会議全回終了後に質的帰納的に分類した。

・ファシリテーターの役割の分類

ファシリテーターの役割の分類Stoecker（2008）に基づき「リーダー・鼓舞者」「コミュニティ・オーガナイザー」「民衆教育者」「参加型調査者」の4分類を用いた。

なお、それぞれの役割は以下の通りである。

リーダー・鼓舞者；もっとも総合的で他の役割の一部をもあわせもつ。一般的には研究者よりも問題の重要性を訴えコミュニティの人たちをまとめることのできるコミュニティメンバーが担うことが多い。

コミュニティ・オーガナイザー；コミュニティを組織化していく役割。人々に強制でなく刺激を与える。その人たちの目線に立ってその人たちが自分たちで計画・実施・評価できるように促していく。成果よりもプロセス、問題の解決、人々の成長、を重視していく。

民衆教育者；コミュニティの人々の学びのプロセスを促進する役割。知識のない人に知識を提供

する「教師」でなく人々がすでに有している知識を自分たちで再発見したり新しい知識を獲得したりするのを助ける役割を担う。

参加型調査者；プロジェクトに必要な関連資料を素早く入手したり質問紙やインタビュー内容をすぐに準備したりコミュニティのメンバーからの要望に応えたり協働によるリサーチを進めたりしていく役割。単なる技術的な役割だけを担うのではなく知識創造における関係性の変革、リサーチのプロセスにおける民主的参加が実現できるように協働する必要がある。

また、目的については各行為の類似性と相違性に注意しながら内容を分類したのち、命名した。
・ファシリテーターとメンバーとのやり取りへの分析

ファシリテーターがメンバーに投げかけた初回の「ディスカッションの呼び水」および健康課題の決定に向けた話し合いの中で「健康課題としては浮上しながらも決定に至らなかった」事についてのやり取りへの分析を行った。グループ・ディスカッションは参加者間の議論を刺激し、そこで発展するダイナミクスが知見を得る鍵として活用される（ウベエ、2011）。著者が文脈の中に不在で観察は事実として報告される、もしくは発言やインタビューからの引用を用いて書き起こされる「写実主義の物語（realist tales）」に対して「告白体の物語（confessional tales）」は人格化された著者性 authorship と権威性 authority の特徴を持つ。この場合に著者は観察、解釈、また論文の作成の場面で自分が果たした役割を書き記す。フィールドでのヘマ、問題、失敗などと共に自分自身の視点も書く対象となる（ヴァン、1999）とされる。方向性を決める「ディスカッションの呼び水」や研究者が行ったファシリテーターとメンバーとのやり取りや投げかけはグループダイナミクスに影響を与えていると考え、メンバーの発言とそれに対するファシリテーターの発言を提示した。

シニア・ヘルスコーディネーターが所属する SC 会員への意識調査

【目的】地方農村部 SC 会員の就業への想いと現在と 10 年後に抱えているであろう心配事（以下、将来の心配事）を性別および年代別の観点から把握し会員の継続就業に繋がる健康づくりへの示唆を得ることとした。

【方法】地方農村部にある SC 会員全数（293 人）へ無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は 1)対象者の基本属性（性別、年齢、他）2)就業への想い（14 項目）3)現在と将来の心配事（17 項目）とした。分析方法は記述統計の後、現在と将来の心配事それぞれについて性別、前・後期高齢者の群間の 2 検定を行った。有意水準は 5%とした。調査期間：2017 年 5 月

【倫理的配慮】対象者全員に文章で調査目的、方法、参加の自由等を説明し調査協力を得た。調査票の返信をもって調査同意を得ると明記し同意を得たと判断した。なお、石川県立看護大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（看大第 135 号）

4. 研究成果

(1) 国外先進事例の収集

【結果】 ボランティア活動参加者の健康観は一様に高く、『自分の健康は自分で守るもの』という考え方の根底には研究協力者の親世代に行政から発信された啓発的メッセージの影響が大きいとの意見が多数派であった。ストックホルム市の教会ボランティアからは、定年前のグラフィック技能を活かし協会のポスター作成を活動としていた女性の場合は、定年後の引っ越しを契機に近くの教会と出会い、これまでの技能を活かしたことに満足感を抱いていた。また、教会がこれまでの集まりではなく、貧困層や孤独な人を意識したプログラムを提供し市民からの従来のイメージを変えようとしている取り組みが見られた。定年前の技能を活かし起業した男性の場合は、仕事で社会貢献できることが生きがいと可能な限り働きたいと語った。

また、ヘルシンキ中央図書館で児童への読み聞かせを実施しているグループからは世代を超えたつながりによる精神的満足感を挙げた意見が聞かれた。地域の保健センターを会場にした IT ボランティアの活動では、会場や広報、電源や Wi-Fi などを行政が準備してくれるから自身は IT 技術だけを提供すればいいので協力しやすいとの意見があった。また、利用者は高齢者が高齢者に質問するので、若者への質問と異なり気が楽でわかりやすいとの意見が聞かれた。

(2) シニア・ヘルスコーディネーター養成の検証

シニア・ヘルスコーディネーターによる主体的健康づくり活動の展開のプロセス

【結果・考察】会議を合計 7 回（合計 14 時間程度）開催した。

研究協力者（SC 会員）の概要は、途中退会者 1 名を除き、性別は男性 5 名、女性 6 名。平均年齢 67.4 ± 2.5 歳、SC 加入年数は 5.4 ± 2.5 年であった。全員家族と同居。定期的な通院は 6 名であった。

健康課題決定までに健康課題は 5 つ抽出された。その内容は、認知症、自分で思っているより危険な自動車運転、就業中のストレス、注意力の低下へと変化し、最終的に、老いへの自覚が決定された。老いへの自覚以外の健康課題は、専門職によるミニ健康講話や体験企画を実施後に関心が低くなり、「まだ大丈夫」との思いから、新たな健康課題探索へ関心が移っていった。これは SC 会員の当事者でもある自身にとって身近に感じられなくなったことが考えられる。一方で、「老いへの自覚」はコミュニティエンパワメントの過程における準備期において、SC 全体の健康課題として受け入れやすいと研究協力者が納得できたと考える。

シニア・ヘルスコーディネーターによる主体的健康づくり活動実施の変化

【結果】活動のための会議は全8回開催した。活動は会員全員が将来に備えるための内容として高齢者疑似体験を実施した。対象者の概要は、SC退会者1人を除く11人で性別；男性5人、女性6人。平均年齢 67.4 ± 2.5 歳、SC加入年数； 5.4 ± 2.5 年であった。独居はおらず、半数が定期的に通院していた。各尺度得点の変化では協同作業認識尺度の下位因子である互惠懸念因子の得点のみ有意差を認めた。第1回会議前と4回会議終了後の間に得点の低下が認められた。

【考察】互惠懸念とは、協同作業によって参加者全員が平等に利益を得ることは難しいという認識であり、互惠懸念因子得点が高いほど作業において個人志向が強いといえる。よって企画運営会員は活動を通し協働作業の利点を感じていることが示唆された。また、地方農村部SCにおいて集団による健康づくりを目的とした活動への今後の期待を得た。

活動会議におけるファシリテーターの役割と目的の分析

【結果】活動会議の前後にファシリテーターとして研究者が行った行為は31項目であった。一方、活動会議中の行為は53項目であった。研究者がファシリテーターとして参加した活動会議での行為について活動会議の事前・事後および活動会議中それぞれに分類した。

）活動会議の前後：役割の4分類では「リーダー・鼓舞者」「コミュニティ・オーガナイザー」「民衆教育者」「参加型調査者」の内、「リーダー・鼓舞者」はなく、「コミュニティ・オーガナイザー」の役割として実施している部分が多かった。

）活動会議中：役割の4分類では「リーダー・鼓舞者」「コミュニティ・オーガナイザー」「民衆教育者」「参加型調査者」の内、「リーダー・鼓舞者」はなく、「コミュニティ・オーガナイザー」「民衆教育者」の役割として実施している部分が多かった。

「コミュニティ・オーガナイザー」としては活動会議の参加者全員の語れる話題で一言の導入、2人組で話す形式の導入（隣の人）、さらに細かいグループに分けて話し合う等の全員が話せる環境づくりを中心に行っていた。また「時間厳守（決まった時間にはじまり・終わる）、時間が不足した場合は、次回にプログラムを変更する」では、予定通りいかなかったとしても必ず時間通りに終わることを重視した。また、活動会議の冒頭で必ず「前回の振り返りを要約して話す」、「前回の振り返りを紙で渡す」、によって前回の活動会議内容を確認し、今後の展開の提案、調査（会員アンケート案）の提示、催し案の提案、催し行動計画案の提案等の仮定としての提案を行った。

「民衆教育者」としては前回振り返りが書かれた紙面を活動会議参加者全員に渡したうえで、要点について解説を行った。また、ホワイトボードやフィリップを用いて議論が口頭で消えてしまわないための工夫を行っていた。「参加型調査者」としては、活動会議の中で出された意見を基にした会員アンケート案を事前に作成して来たものを提案し、メンバーの意見を求めたり、メンバーが考えてきた質問項目を加えたりする調整を行っていた。

シニア・ヘルスコーディネーターが所属するSC会員への意識調査

【結果】回答は143人（回収率48.8%）、記載不備2人を除く141人を有効回答とした。性別は男性74人、女性65人、不明2人。平均年齢は 71.7 ± 5.6 歳で前期高齢者が99人（70.2%）、後期高齢者42人（29.8%）。就業への思いは「仕事を通じて人と交流できる」86人（61.0%）、「働いて賃金を得るのが嬉しい」81人（57.4%）、「働くことで自然と体を動かす事ができる」80人（56.7%）が高率であった。前・後期高齢者の群間の2検定の結果、「好きな事を仕事としてできるのが嬉しい」、「人から感謝されるのが嬉しい」、「働き続けられるよう体調管理には気を遣う」が後期高齢者群で高く有意差が認められた（ $P < 0.01$ ）。

現在の心配事は体力低下や筋力低下64人（45.4%）、将来の心配事は病気（物忘れ・認知症など）78人（55.3%）が最も高かった。性別では将来「病気（がん・心臓の病気・脳梗塞など）」が女性に多く、前・後期高齢者の別では、現在の心配事「病気（がん・心臓の病気・脳梗塞など）」、将来の心配事は「家族の介護」、「自動車の運転」が後期高齢者群で高く有意差が認められた（ $P < 0.05$ ）。

【考察】所得を得る以外に交流や健康に働く意義を感じている者が多かった。また、後期高齢者では働き続けられている事や感謝されることに価値を置き、そのために健康管理に気を遣う様子がうかがわれた。年齢によっても就業の意義は異なる。よって就業目的や年代に配慮した就業支援が求められている事が示唆された。SC会員は現在就業できていることで総じて健康レベルは高いことが考えられる。よって前期高齢者にとっては後期高齢者に比べ心配に考える割合は低く将来に備えようとする意識付けも弱いのではないかと考えられる。また、前期高齢者の段階から、もしもに備えた健康づくりに取り組めるような働きかけの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 米澤洋美、秋原志穂	4. 巻 50
2. 論文標題 地方農村部シルバー人材センター会員の抱える現在と将来の心配事－性・年代別の比較－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第50回日本看護学会論文集	6. 最初と最後の頁 191-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米澤洋美	4. 巻 22
2. 論文標題 シルバー人材センターにおける健康管理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 米澤洋美、石垣和子、大木秀一	4. 巻 19
2. 論文標題 シルバー人材センター会員の自主的健康づくり活動の意義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福井大学医学研究雑誌	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米澤洋美	4. 巻 49
2. 論文標題 地方農村部シルバー人材センター会員の就業の意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本看護学会論文集．ヘルスプロモーション	6. 最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 米澤洋美、石垣和子、秋原志穂
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センター会員の自動車運転技術自己評価の関連要因
3. 学会等名 第32回日本医学看護学教育学会学術学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 米澤洋美、石垣和子、秋原志穂
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センター会員による健康づくり活動でのグループへの関与の過程
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 米澤洋美、石垣和子、秋原志穂
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センター会員の自動車運転技術自己評価の関連要因
3. 学会等名 第32回日本医学看護学教育学会学術学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 米澤洋美
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センター会員による健康課題の決定プロセス
3. 学会等名 第9回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 米澤洋美、石垣和子
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センターにおける健康づくり活動企画運営委員の変化
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米澤洋美、秋原志穂
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センター会員の抱える現在と将来の心配事－性・年代別の比較－
3. 学会等名 第50回日本看護学会ヘルスプロモーション
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米澤洋美
2. 発表標題 地方農村部Xシルバー人材センター会員の抱える現在と将来の心配事
3. 学会等名 第21回日本地域看護学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米澤洋美
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センター会員の就業の意義
3. 学会等名 第49回日本看護学会ヘルスプロモーション
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米澤洋美、石垣和子
2. 発表標題 シルバー人材センター会員同志の健康づくりと保健師等との連携に関する全国調査
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米澤洋美、石垣和子
2. 発表標題 シルバー人材センターにおける会員の自主的健康づくり活動の意義
3. 学会等名 第6回日本公衆衛生看護学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米澤洋美、石垣和子
2. 発表標題 地方農村部シルバー人材センター会員のヘルスリテラシー・協同作業の認識
3. 学会等名 第28回日本医学看護学教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	長谷川 美香 (HASEGAWA MIKA) (90266669)	福井大学・学術研究院医学系部門・教授 (13401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	北出 順子 (KITADE JYUNKO) (80509282)	福井大学・学術研究院医学系部門・講師 (13401)	
研究分担者	秋原 志穂 (AKIHARA SHIHO) (30337042)	北海道科学大学・保健医療学部・教授 (30108)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関